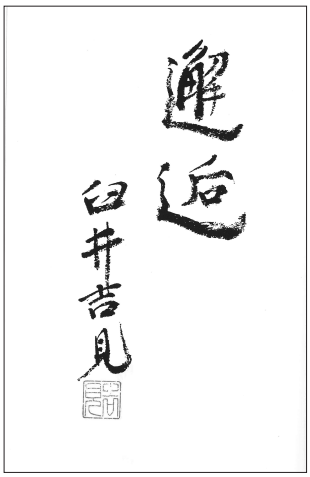
展示記録

小説『安曇野（あずみの）』完結50周年企画「邂逅（かいこう）」（2024年９月８日～12月27日）

平沢　重人

１　はじめに

1964（昭和39）年７月「中央公論」921号に「安曇野（あずみの）新連載」として世に出た小説『安曇野』は、ハードカバー版となって1965（昭和40）年６月10日に第一部が筑摩書房から発刊された。そして最終巻となる第五部が、1974（昭和49）年５月31日に発刊されてから、今年で50年を数える。筑摩書房（株）は、小説『安曇野』（文庫本版）の復刊を計画し、安曇野市は、クラウドファンディングを実施（2024（令和６）年５月30日から８月27日）するなど、この復刊を支援する取組を始めた。



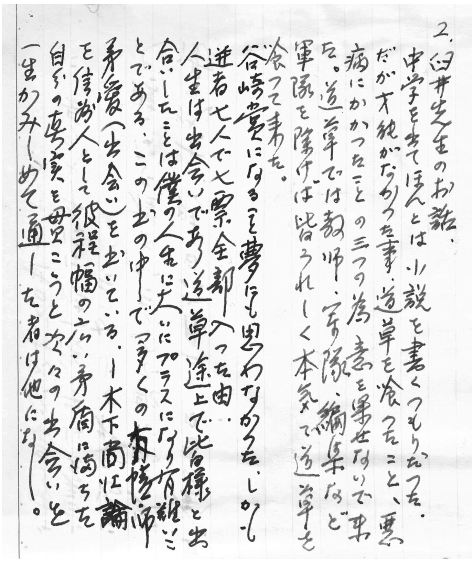
鶴林堂版『安曇野』
第一部扉
（寺内すみ氏資料）

臼井吉見（以下、臼井）は、1974（昭和49）年、東筑摩塩尻教育会総会において「なるべくちがった人間との対話、意見が違うからこそ、耳を傾けて聞き入り、それによって自分を高めることが可能になるわけであります。そういう世界を全面的に繰り広げようというのが『安曇野』のもくろみでありました。あり得ない対話を含めて、千人近くの登場者の対話を繰り広げました。それらの人は、それぞれが主役であって、脇役は一人もいない。堂々たる一個の主役として描いたつもりでおります。」（1976（昭和51）年『教育の心』毎日新聞社）と語っている。臼井が著した小説『安曇野』は、臼井自身が生き方の根本とした「出会いと対話」を具象化した作品である。「安曇野」の名を全国に広めるきっかけをつくった臼井が紡いできた世界を再確認する機会としたい。

２　小説『安曇野』の誕生

『臼井吉見集』５（1985（昭和60）年、筑摩書房）巻末の「初出誌紙一覧」によると、全５巻の『臼井吉見集』に掲載されている臼井の総随筆数は295本になる。その中で小説『安曇野』執筆までの随筆数は、239本を数える。文芸、社会、教育、政治など幅広いジャンルを取り上げている。1964（昭和39）年、59歳となった臼井が、近現代の日本を映した歴史小説『安曇野』を執筆した基盤は、充分にあったということである。

臼井は、小説『安曇野』完結の年、1974（昭和49）年12月６日に松本附属小学校勤務時代の同僚たちに「中学を出てほんとは小説を書くつもりだった。だが才能がなかったこと、道草を喰ったこと、悪病にかかったことの三つの為、意を果たせないできた。道草では、教師、軍隊、編集など軍隊を除けば、皆うれしく本気で道草を喰った。（略）人生は出会いである。道草


臼井の話を記録した手帳「松本付属会雑記帳」1974（昭和49）年12月６日
（臼井吉見文学館資料（ほたるぶくろの会）57）

途上で皆様と出会ったことは僕の人生に大いにプラスになり、有難いことである。この書の中で多くの友情、師弟愛（出会い）を書いている。」と語っている。「中央公論」1964（昭和39）年７月の初掲載から翌年４月まで、この10カ月の間に第一部、約1,000枚を書き上げている。臼井が教師時代に教え子に伝えた言葉のひとつに「滾々汨々」[1)]（こんこんこつこつ、こんこんいついつ）がある。筑摩書房の仕事に区切りをつけた臼井は、満を持して小説を書き始める。次から次へと言葉が湧いてきたことが推察できる。

THE CHUOKORON
中央公論

安曇野
（あずみの）〈新連載〉
臼井吉見
装画・武井武雄

その一

水車小屋のわきの榛林を終日さわがしていた風のほかに、もの音といえば、鵜撃ちの猟銃が朝から一度だけ。にわかに暗くなってきた軒さきに、白いものがちらつき出した。

榛林には湧き水がある。おきよは水汲みに何回往復したかわからない。天秤棒を肩にしたまま、二つの桶をかわるがわるつっこんで水を汲み、だらだら坂をのぼって、台所の二石入りの水甕まで運んでくる。そのおきよが、勝手わきの茶の間へ顔を出した。

「あねさまア、とうとう雪になりましたに。おやまあ、よくもこんねにきれえに出来たもんだ…」

良の朝からはじめたクリスマストリーの飾りつけが出来あがりかけていた。去年とちがって、五月生れた俊子がいるとはいえ、おかしいほど手間

「中央公論」新連載「安曇野」（碌山美術館蔵）

1962（昭和37）年、エジプトのカイロ博物館を訪れた臼井は、木彫「村長」像と出会う。その時のことを小説『安曇野』第一部「作者敬白」にこう記している。「僕は、荻原守衛を思い浮かべていた。彼がパリでロダンに学び、帰国の途中、エジプトに立ち寄ったのは、明治四十一年であった。そこの木彫、わけても「村長」にいたく感動し、それが帰国後の仕事に決定的な影響をもたらしたのだった。（略）エジプトで見た古代彫刻は、僕のなかに、さまざまの作用をもたらしたかに見える。前記の小説にとりかからせたのが、その一つである。」

小説『安曇野』の初出は、1964（昭和39）年７月「中央公論」921号である。2008（平成20）年３月「臼井吉見文学館春の講演会」に於いて、中央公論の編集者であった利根川裕氏は、「安曇野の雑誌掲載にあたって、吉見は、同じ「中央公論」誌上に、島崎藤村の「夜明け前」が掲載された時と同じ体裁にしてほしいと望んだ。」と語っている。

第一部を書き終えた時に「どうあっても、ひきつづき、愛読をお願いしなくてはならない」と読者に呼びかけた臼井であったが、白内障や脳血栓、糖尿病などの病患が襲う。５年近くの中断を経て、1970（昭和45）年１月号から1973（昭和48）年12月号まで１回も休載することなく、「安曇野」は完結する。第二部からの掲載は、「中央公論」ではなく、臼井が初代編集長を務めた筑摩書房の雑誌「展望」である。小説『安曇野』第五部（1974（昭和49）年５月31日筑摩書房）の作者敬白に「心はこめたが拙い作品を、つつしんで、サイパンでいのちを終えた、松本連隊から転属のトラック島補充部隊将兵と、併せてわが古田晁の霊にささげる。」と記している。臼井は、筑摩書房草創期、1943（昭和18）年碌山の写真集を刊行しようと土門拳に撮影を依頼するが、戦争激化によりこの企画は、頓挫となった。碌山に惹かれ、井口喜源治、相馬愛蔵、相馬黒光、木下尚江を中心人物とした展開した原稿用紙5,600枚に及ぶ小説『安

曇野』は、碌山館の名物男 横山拓衛の「信濃の国」の歌声で終わる。

３　臼井と紡ぐ

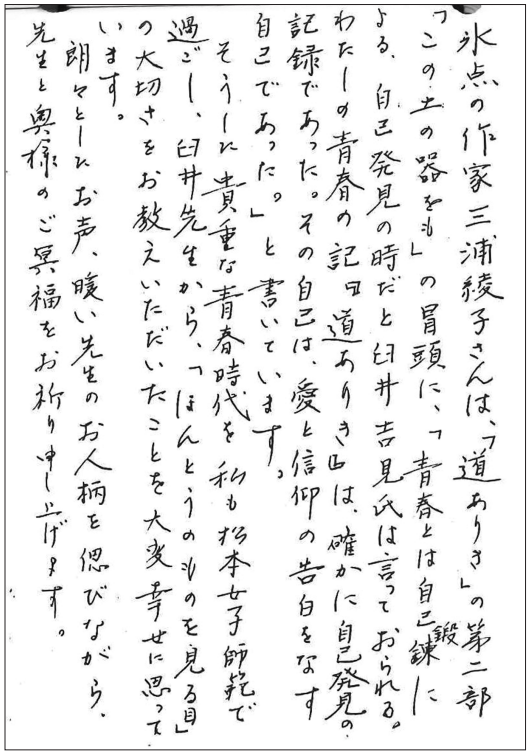
2021（令和３）年４月、増澤フユミさん（臼井の二女）から臼井吉見宛書簡36点と葉書67点の安曇野市教育委員会への寄贈を受けた。この資料の公開に向けて臼井に書簡や葉書を宛てたご本人やご遺族の方に連絡を取らせていただいた。その折に届けられた言葉は「母から吉見先生のことはよく聞いておりました。母の懐かしい文字を拝見しました。」「母曰く、父は臼井吉見氏を非常に尊敬していた。褒められると天にも昇る心地だったと、先ほど夕食の席で話題になりました。」などである。臼井が出会った一人一人と丁寧な親交を重ねていた様子が伝わってくる。そんな臼井の親交（紡ぎ）の一端を紹介する。

（１）教え子と紡ぐ

東京帝国大学国文科を卒業後、高崎連隊での軍生活を終えた臼井は、1931（昭和６）年福島県双葉中学校に勤務している。以降1943（昭和18）年東京女子大を退職するまで国語教師として教員生活を送る。

1991（平成３）年７月12日臼井吉見文学館竣工式には、全国から教え子たちが参集した。その日の祝賀会では、伊那中学校の一人 小野寛さんが乾杯の発声をされ、福島県双葉中学校の一人 田中清太郎さんが万歳三唱の音頭をとられた。臼井には、４人子どもがいるが、子どもさんは「父には、教師や編集者、評論家、小説家の四つの顔があると言われますが、一番似合っているのは教師の顔だと思います。」と語ってくれた。

松本女子師範学校　臼井の講義「志賀直哉、芥川龍之介」を終えて（1942（昭和17）年３月11日）
（臼井吉見文学館資料71）



氷点の作家三浦綾子さんは、「道ありき」の第二部「この土の器を」の冒頭に、「青春とは自己発見の時だと臼井吉見氏は言っておられる。自己発見の時だと臼井吉見氏は言っておられる。わたしの青春の記録であった。その自己は、愛と信仰の告白をなす自己であった。」と書いています。

そうした貴重な青春時代を私も松本女子師範で過ごし、臼井先生から、「ほんとうのものを見る目」の大切さをお教えいただいたことを大変幸せに思っています。

朗々とした、暖い先生のお人柄を偲びながら、先生と奥様のご冥福をお祈りいたします。

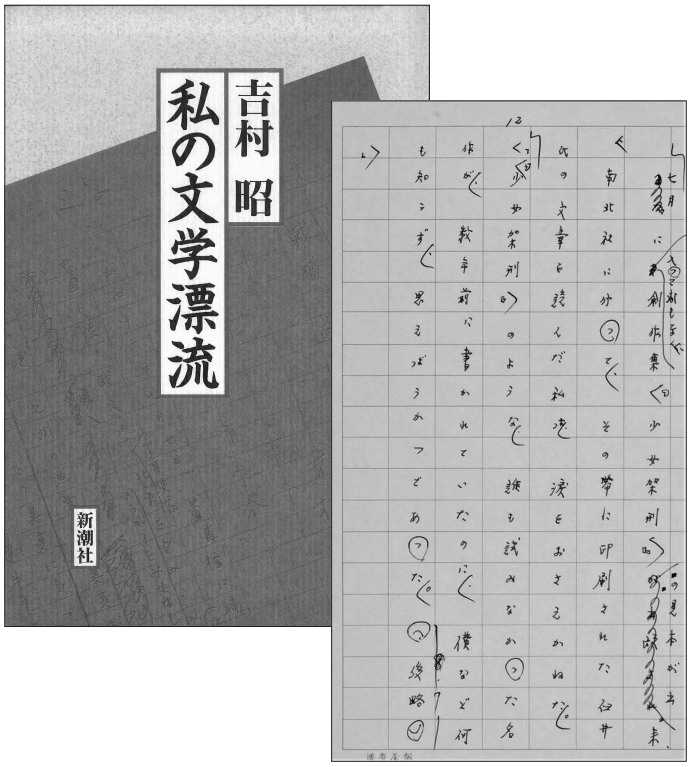
臼井一周忌を偲ぶ
松本女子師範学校教え子からの葉書
（臼井吉見文学館資料（ほたるぶくろの会）98）

（2）作家と紡ぐ

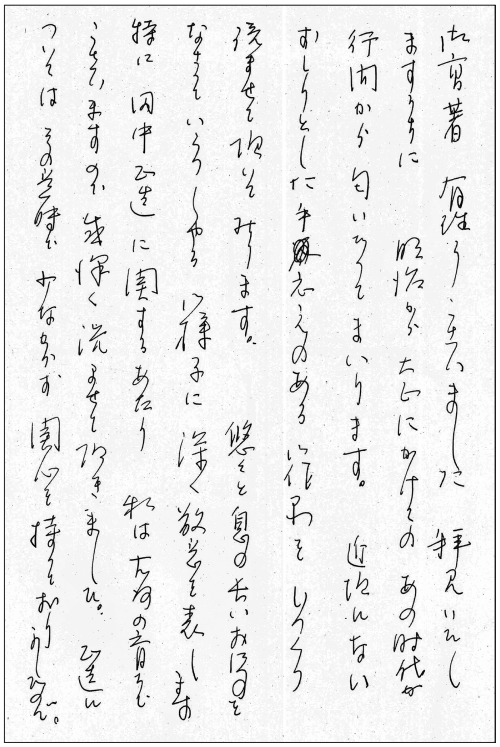
『私の文学漂流』（1992（平成４）年、新潮社）は、吉村昭が小説家としての歩みを記した自伝的な作品である。その第11章「会社勤め」の中に臼井について記した文書がある。「七月に入って間もなく、創作集『少女架刑』の見本が出来、南北社に行って、その帯に印刷された臼井氏の文章を読んだ私は、涙をおさえかねた。「『少女架刑』のような、誰も試みなかった名作が、数年前に書かれていたのに、僕など何も知らず、思えばうかつであった。（後略）」「文学者」を受け取ることをこばまれて臼井氏の家を出た時、激しくよろめいた自分のことがよみがえった。この一文を読んで、小説を書きつづけてきてよかった、生きていてよかった、と思った。」である。1974（昭和49）年『安曇野』谷崎潤一郎受賞記念式典の司会を務めたのは、吉村である。1992（平成４）年７月12日吉村は、臼井吉見文学館開館１周年記念講演会で講師として招かれ「私にとっての恩師は、臼井先生と思い続けています。」と語っている。二人の敬慕のつながりを感じることができる。

小説家 永井路子は、東京女子大での臼井の教え子である。『臼井吉見集２』月報の一部を紹介する。

「戦後しばらくお目にかかる折もなかった。評論家として活躍されている先生を「遥拝」しているうち、思いがけない機会がやってきた。『婦人公論』に「15年目のエンマ帖」というタイトルの女子大の教え子を先生が訪ねられる企画があり、歴史ものを書きはじめていた私も御指名にあずかったのである。まだ、懸賞小説に入選したくらいで、雑誌社勤めをしていたころのことだ。先生の御質問は鋭かった。ときどき、ぎょっとするような切り込み方をなさる。まさに十五年目に面接試験をうけている感じだった。しかし、書いて下さった御文章はやさしく、「武士の情」にあふれていた。本当のエンマ帖にはかなりきびしい点がつけられたのだろうが、と思いながら女子大の試験の記憶をよみがえらせていた。」



吉村昭著『私の文学漂流』生原稿
（吉村昭記念文学館）


永井路子葉書『安曇野』寄贈の礼状
（臼井吉見文学館資料（増澤フユミ氏資料）31）

「安曇野」第一部を書き終えた臼井は、視力の衰えを感じた。白内障である。1962（昭和41）年に右眼、1968（昭和43）年は左眼の手術を行った。そして1968（昭和43）年12月20日脳血栓で倒れ、鹿教湯温泉療養所での療養を始めた。翌年、虎の門病院で糖尿病との診断を受け、入院することになる。1969（昭和44）年11月21日に川端康成から手紙が届いた。臼井の退院を喜びながらも体調を気遣う内容が記されている。臼井は前月の10月15日に退院をしている。その報告を川端にしたのかは不明であるが、川端の書簡が拝復とあることから、臼井の返信であろう。川端が自身の体調や生活ぶりについて赤裸々に記されていることから、二人の親交の深さを知ることができる。

川端の死後、1977（昭和52）年臼井は川端を意識した『事故のてんまつ』を発表するが、川端家や部落解放同盟から批判を受け、書籍は絶版となる。川端とは、生前親交があっただけに残念である。

臼井吉見文学館資料（増澤フユミ氏資料）87

川端康成書簡
臼井吉見宛　昭和四十四年十一月二十一日
拝復　御回復の御よろ
こび申しおくれましたが
何よりと存じます　冬ニ向ひ
一層の御自愛なさつて下さ
いませ　私も数年前肝臓
を眠り薬でやられ危いとこ
ろでした　白内障ハ遅々と進ん
でゐるのでせう　軽井沢レイク・
ニユウ・タウンの頂上（妙義の眺めニ
ひかれ）の土地を得ましたが
どうなりますか　豆本ニお送り
いたしました　十一月二十一日　川端康成
臼井吉見様

臼井は、杉並に居を構えていた。杉並は、関東大震災以降、中央本線の沿線という暮らしやすさと新興住宅地であることに惹かれ、杉並に居住する作家が多くいた地域である。「阿佐ヶ谷会文士会名簿」（杉並区立阿佐ヶ谷図書館）に臼井の名前がある。安曇野市文書館には、井伏鱒二、上林暁、河盛好蔵、中野好夫、火野葦平から臼井宛の書簡や葉書があるが、皆この文士会のメンバーである。

4　出会いと対話の世界

臼井吉見文学館建設のきっかけは、1989（平成元）年９月堀金村村議会での猿田國夫村長の答弁から伺うことができる。「臼井先生が亡くなられまして、昭和62年の９月、東京で偲ぶ会が催されました。（略）　観光の一環として使われることが多い『記念館』というより、臼井さんのことについて勉強する人が訪れる程度の『文庫』の方が非常に適切ではないかということを言われております。臼井さんは郷里を偲んだこと、非常に静かな場所を好んだことから、常念岳も見える、臼井さんが校歌の作詞をされた中学校の正門の西側の空き地に来年度は建設してまいりたい。建物は土蔵造りで建設を致したい。」臼井は、1987（昭和62）年７月12日に亡くなった。生前臼井は、

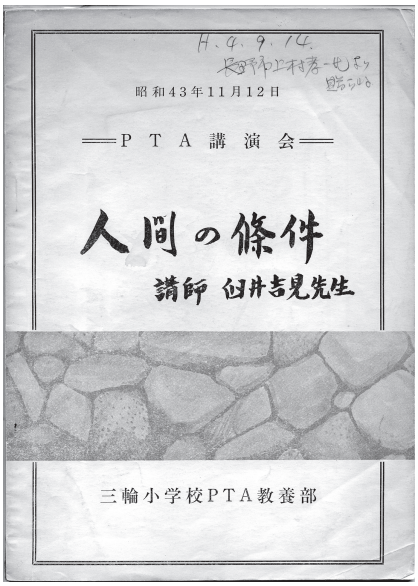
1988（平成元）年から続いている「『安曇野』を読む会」毎月第３火曜日開催

葬儀も含め、仰々しい催事は望んでいなかった。猿田村長は、偲ぶ会に参加された方の姿や安曇野の名を広めるきっかけをつくってくれた臼井を慕う方たちの声を受けて、「臼井吉見文学館建設実行委員会」立ち上げる。そして、1991（平成３）年７月12日臼井の命日に竣工となった。

現在、文学館では、友の会（2007（平成19）年２月設立）を中心に毎月６講座の研修会（読書会）が開かれている。また友の会設立の前、1988（平成元）年からスタートしている「『安曇野』を読む会」は、35年目を迎える。今、３巡目を読み合わせ中である。この「『安曇野』を読む会」は、山ノ内町や松本市など安曇野市以外の場所でも開かれている。文学館立ち上げの答弁で猿田村長が語った言葉通り、臼井を通して勉強（出会いと対話）する仲間が育っている。そのランドマークとして臼井吉見文学館はある。

5　50年の時を超えて

2024（令和６）年６月17日兵庫県立神出学園校長 榎本好子氏よりメールをいただいた。「神出学園は、不登校・ひきこもりを経験したけれども自分を変えたい、生き方や進路実現への意欲がある16～24歳の若者を対象とした全国唯一の県立宿泊型フリースクールです。「からだを動かし、頭を働かせ、心に感ずる」をモットーに30年不登校ひきこもり支援を続けています。このモットーは、本学園の竣工・開園披露式で初代学園長 小林剛が語った言葉です。」そして後日、「こころ豊かに～神出学園のあゆみ～創刊号」（1995（平成７）年、兵庫県立神出学園）掲載の小林剛学園長の語った言葉が届いた。どのような経過で小林学園長が臼井の言葉と出会ったのかは不明であるが、この言葉は、1968（昭和43）年臼井の「人間の條件」と題した「長野市立三輪小学校PTA講演会記録」にある。榎本好子校長は、「この言葉は、学園のモットーとして大事にしたいが、筆で書いた縦書きの達筆な文字、学園生にとっては昔のもの、古い言葉と感じてしまうようです。横書きの今風のフォントでロゴを作りたい。臼井吉見先生や近しい方々はどう思われるのか手掛かりを探っています。」と続けられた。この言葉は、安曇野市の教育大綱に記されている。



臼井吉見文学館資料
（ほたるぶくろの会）51

現在、木島平小学校前庭に「からだを動かし　あたまを働かせ　心に感ずる」の石碑がある。木島平中部小学校（統合前）創立100周年記念（1973（昭和48）年）に校長上村孝一が学校教育目標の具体目標としてこの言葉を示したと沿革誌に記録がある。上村校長は、1968（昭和43）年長野市立三輪小学校に勤務していた。臼井の講演を聞いていたのである。同年堀金中学校で生徒に「人生について」と題した講演をしている。「チームワークとか団結というものは同じ気心のものがいくら集まってもチームワークでもなければ、団結でもない。自分のもっていないもの、自分のかなわないものを、こういうもの

木島平小学校前庭の石碑

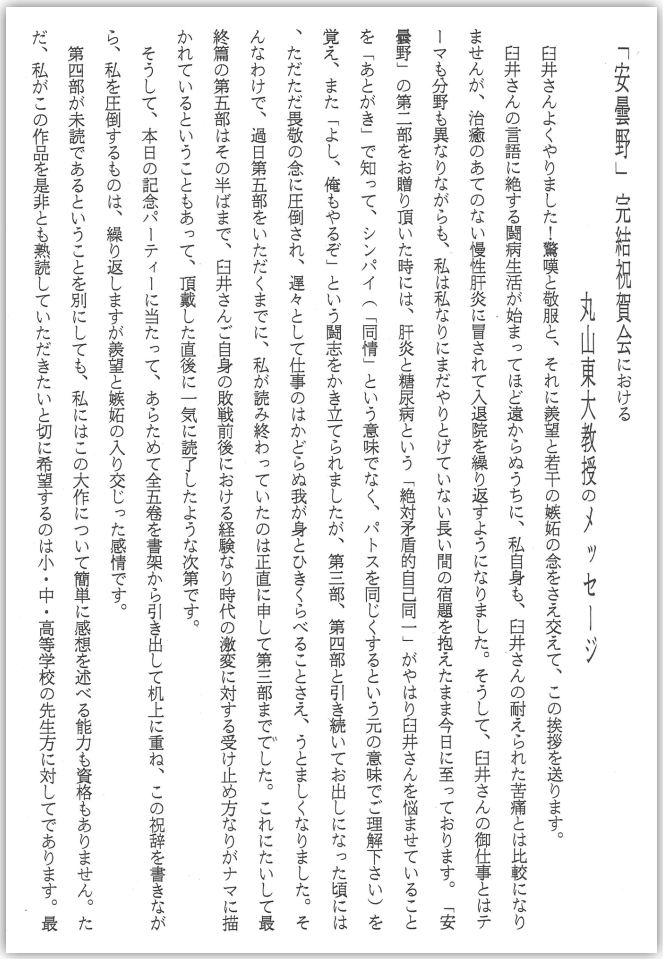
を本当に認めるということが、身にかかってくる一番大事なことだと思う。」出会いと対話の大切さを伝えている。

2024（令和６）年７，８月長野県立歴史館において「疾風怒濤　木曽義仲展」が開催された。その展示動線の最後に、なんと臼井吉見が登場である。旧制中学校時代の芥川龍之介が記した「木曽義仲論」を絶賛した臼井の言葉（『現代日本文学大系43芥川龍之介集』（1968（昭和43）年筑摩書房）を通して、この企画を総評していた。

2024（令和６）年８月29日岩波書店から『丸山眞男集別集第五巻』が刊行された。続補遺のなかに「「安曇野」完結祝賀会における丸山東大教授のメッセージ」が紹介されている。平石直昭氏（東京大学名誉教授）は、このメッセージは、2016（平成28）年６月文学館を訪ねた川口重雄氏（丸山眞男手帖の会代表）が関係者に伝えたことから広く知られるようになったと文献解題に記している。

小説『安曇野』完結50周年の年に、兵庫県立神出学園のモットーとなっている臼井の言葉が注目されたり、長野県立歴史館企画展や『丸山眞男集別集』の完結編に臼井が取り上げられたりしている。臼井からの今を生きる私たちへのエールと考えたい。

長野県立歴史館企画展
「疾風怒濤　木曽義仲」で紹介された臼井吉見



「安曇野」完結祝賀会における
丸山東大教授のメッセージ

臼井さんよくやりました！驚嘆と敬服と、それに羨望と若干の嫉妬の念をさえ交えて、この挨拶を送ります。

臼井さんの言語に絶する闘病生活が始まってほど遠からぬうちに、私自身も、臼井さんの耐えられた苦痛とは比較になりませんが、治癒のあてのない慢性肝炎に冒されて入退院を繰り返すようになりました。そうして、臼井さんの御仕事とはテーマも分野も異なりながらも、私は私なりにまだやりとげていない長い間の宿題を抱えたまま今日に至っております。「安曇野」の第二部をお贈り頂いた時には、肝炎と糖尿病という「絶対矛盾的自己同一」がやはり臼井さんを悩ませていることを「あとがき」で知って、シンパイ（「同情」という意味でなく、パトスを同じくするという元の意味でご理解下さい）を覚え、また「よし、俺もやるぞ」という闘志をかき立てられましたが、第三部、第四部と引き続いてお出しになった頃には、ただただ畏敬の念に圧倒され、遅々として仕事のはかどらぬ我が身とひきくらべることさえ、うとましくなりました。そんなわけで、過日第五部をいただくまでに、私が読み終わっていたのは正直に申して第三部まででした。これにたいして最終篇の第五部はその半ばまで、臼井さんご自身の敗戦前後における経験なり時代の激変に対する受け止め方なりがナマに描かれているということもあって、頂戴した直後に一気に読了したような次第です。

そうして、本日の記念パーティーに当たって、あらためて全五巻を書架から引き出して机上に重ね、この祝辞を書きながら、私を圧倒するものは、繰り返しますが羨望と嫉妬の入り交じった感情です。

第四部が未読であるということを別にしても、私にはこの大作について簡単に感想を述べる能力も資格もありません。ただ、私がこの作品を是非とも熟読していただきたいと切に希望するのは小・中・高等学校の先生方に対してであります。最

1974（昭和49）年６月７日新宿中村屋で開かれた「『安曇野』出版祝賀会」の届けられた丸山眞男東京大学教授のメッセージ（一部）（臼井吉見文学館資料19）

註

１）　言葉が湧水の様に湧き上がってくる様子のこと

企画展関連講座「臼井と紡ぐ」

1　趣旨

臼井吉見は「出会いと対話」を信条にして生きた教育者であり、編集者であり、評論家であり、小説家である。臼井吉見が親交を重ねてきた姿を随筆や書簡などを通して紹介しながら、どうして2000人を超す人物を登場させて小説『安曇野』を書いたのか、書くことができたのか、その糸口に迫る。

2　日時

2024（令和６）年９月15日（日）　午後１時30分～午後３時

3　講師

平沢　重人（文書館館長、臼井吉見文学館館長）

＊この講座の記録は、当館収蔵記録ＤＶＤにより文書館多目的室で視聴できる。また、当日の配布資料は、文書館閲覧コーナーにて「講演会、講座資料」として閲覧できる。

企画展関連講演会「森鴎外研究者山崎一穎（かずひで）氏を悼む　小説『安曇野』に見る川井訓導事件」

1　趣旨

2024（令和６）年９月14日に急逝された森鴎外研究者の山崎一穎氏が安曇野講演に寄せた思いを共有すると共に、松本女子師範学校松本附属小学校訓導 川井清一郎が「護持院ヶ原の敵討」（森鴎外著）を修身の授業で扱うことにより処罰された、川井訓導事件について小説『安曇野』や「信濃教育界に於ける森鴎外　川井訓導事件の波紋」（1995（平成７）年、跡見学園女子大学紀要）から読み解く。

2　日時

2024（令和６）年10月20日（日）　午後１時30分～午後３時

3　講師

平沢　重人（文書館館長、臼井吉見文学館館長）

＊この講演会の記録は、本号98ページより掲載している。

＊川井訓導事件に直面した教え子の記録（1927（昭和２）年卒業生　昭二会）が「橋渡良知資料」に９点収蔵されている。

企画展関連講座「小説『安曇野』ゆかりの地を訪ねて」＊生涯学習課「安曇野アカデミー」共催企画

1　趣旨

小説『安曇野』に関わる生涯学習課主催の「安曇野アカデミー」講座は、昨年度に引き続きの企画である。臼井吉見、荻原碌山、井口喜源治の墓碑と木下尚江生家（松本市歴史の里）を訪ね、小説『安曇野』の主要登場人物への理解を深める。

2　日時

2024（令和６）年11月17日（日）　午後１時～午後４時30分

3　講師

平沢　重人（臼井吉見文学館館長）、松本市歴史の里館長・学芸員